

アルトゥル・クリステンセンの人と業績

伊 藤 義 教

Arthur Christensen といえば、イランに真の関心をもつものは、その論文や著書の一つや二つは必らず読んでいるだろう。博士の大著 *L'Iran sous les Sassanides* といえば、サーサーン王朝治下のイランの文化、宗教、司法、芸術、科学といった全分野をその政治史とともに精叙した一大文献で、1936年に出た初版はたちまち売切れ、刻苦精励倦むことを知らぬ博士はその後の学界の成果をも取入れて一部を改訂増補し、1944年には再版を出したが、これまた売切れて絶版となっているありさまである。本書についてコペンハーゲン大学教授ボル (Kaj Barr) 博士は追憶記 (後説) で、“イスラム世界とビザンツ双方に影響を及ぼし、それを通じてヨーロッパの文化にも重きをなした文化 (サーサーン朝下のイランの文化) に関して、このクリステンセンの大作 (magnum opus) がながいあいだ国際的規準書となるのはたしかであろう。” (p. 9) といっているが、これは今も誤っていない。そしてこのボル教授は追憶記の終りにこういっている (pp. 16-18) “A. Christensen をその政治論文やジャーナリズムから知るだけでは、だれでもペシニズムがなにかかれの基本的なものであるかの印象を容易にうけるかもしれない。しかし、かれと親しく知りあった人びとは、かれが実際のところ愉快な人柄であったことや、歴史と人間を取扱って得たにがい経験もかれから人生の楽しみを奪去することのなかった点に気付かざるをえなかった。かれは、人生のあらゆるはなやかさへの新鮮な包擁力と自然のなかで生活することへのじかな喜びとを、最後までずっと保持していた。かれは旅行して新しい印象をうけることを愛した、そして生活創造の一偉才としてかれは、時間の経済をよく勘案しながら、仕事と休養をたくみに結びつけ、もって両者がいずれも最大限に可能な収穫をあげるようにすることを心得ていた。倫理や道理を説くかれの執筆ものには合理主義的な、そしていくらか実務的な面がつよく打ち出されているが、かれはそれとは別の面も有していた。かれは音楽を愛し、自身や友人たちのために喜んで作曲した。そしてかれは流麗な詩句を書くことができたがこの才能は、ペルシアの叙情詩やフェルドウシーのシャーナーメおよびオマル・カイヤームの短詩の香りたかい翻訳に

アルトゥル・クリステンセンの人と業績

かれが駆使したそれであった。人生に対する考え方をかれは警句やフィクション的試みに示した。最も成功したのはたしかに作品集 *Cederstræskisten* (シーダー杉の箱) (1940) に収めた、オリエントのモチーフをもつ、おもしろい模作である。人間としては Christensen は非常に愛すべき人で、そのすべての進退が平凡中庸、意見の開陳はやや慎重控え目であったが、やらねばならぬことにはすべて忠実忠誠でいつも変わらなかった。その学問的活動をもってかれは高い権威を得、ヨーロッパでは主要な東洋学会がかれを名誉会員に推し、イランではその政界や文学界の指導者層とイラン滞在中親密な友情を結んでいて、ヨーロッパ、イラン双方で甚だ重きをなしていた。イラン文化の知識をひろめるのにかれの業績が有していた意義や、かれが自身のものを求めぬシンシな友人の一人であった点がイランで理解されたのは、至極もっともなことである。そしてこのことは、なかでも、かれをイラン・アカデミーの最初の外人会員として迎えた点に示された。その訃報に接し主要なイラン紙はみなその詳しい追悼伝記をかかげた、そしてイラン・アカデミー会員は式を催うし席上 Sa'id Nafisi 教授は感動的なことばで、このはるか北方の愛他的友人へのイラン国民の感謝を披歴した。”と。これは故人に最も接近した一人としてその面目を最もよく伝えたものである。ボル教授のこの追憶記は

Arthur Christensen. 9. Januar 1875—31. Marts 1945.

Af K. Barr.

Tale i Videnskabernes Selskabs Møde den 2. November 1945. Med en Fortegnelse over trykte Arbejder af Arthur Christensen

とあるように、故人逝去 (1945年3月31日) の年の11月2日に王立デンマーク学術協会 (Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab) の集会で行なった同教授の講演で、それに “Arthur Christensen の発刊論文のリストを付した” ものである。ボル教授から寄贈されたものは、同協会の1945-46年の業績概観と銘打ったものの別刷である。以下、この追憶記によってク教授の人と業績をつづり、この偉大なイラニストをしのぶとともにボル教授の好意にもむくい、かたがたイランの事物に関心を抱かれる向きにも些少の寄与をささげたい。ただページの都合もあって巻末のリストにまで及ぶことのできないのは甚だ残念であるが、これについては別の機会でも待つほかはない。リストは Hugo Andersen 氏の協力で出来上がったもので、“できるだけ完全に、単行本、雑誌所載の論攷と書評、ならびに文化週刊誌や同月刊誌上の論説が収めてある。これに反し新聞の論説は取入れてない。サルモンセン百科事典中の短い項目も省かれ” (p. 19) ているが、載録されたものは年代順に配列して通し番号を付し、1898年に発表した *Rustem, den persiske Nationalhelt* [パルシアの国民英雄ルステム] にはじまり、まだ印刷中だった

Études sur le persan contemporain をも加えると総数 328, 再版とか外国語に訳されたものも通し番号にはいっているので実数は少々減少するが、打ち立てた金字塔はまさに世紀の偉観である。

さてこの Arthur Christensen は Vilhelm Christensen を父とし Hustru Dorthea Kjerstine C. f. Marcussen を母として 1875 年 1 月 9 日 コペンハーゲンに生まれた。郵便局員だった父は責任感の強い愛すべき人柄であり、母親は器用で快活、多分に精神的な婦人であったが、この独り子の精神的成長に決定的な働きかけはなかったようである。だいいち、この子の稀れな才能はわかっている、それがどんな性質のものかについては、なにも理解してはいなかった。家庭もそんなに裕福ではなかったので父親は生活のことも考えて、かれが法律家になることを望んだ。かれが好きな道を選べたのは、父親の上司が説得したためでもあった。

この子供は読書が大へん好きであった。だから日曜日に両親が遠出につれて出るので迷惑がったものである。こうして書物を友とする静かな生い立ちのなかにも、早くから一定の関心が芽生え、成長していった。13 才の時の学校作文で、“外国語、ことにスラブや東洋のことばを、諸民族の文化やその他の情況といっしょに勉強すること” が楽しみであるとはっきり書いている。子供の時に読んでうけた千夜一夜の印象が後年の研究活動に決定的要因となったことは、自身でよく話したことである。そのほか、少年時の読書はフランスの古典主義と同啓蒙文学ならびに 18 世紀の一般史に主として向けられた。

1893 年, Nørrebro のラテン語兼実務学校 (Latin- og Realskole) に入学してから、教職員試験の準備をはじめた。そしてそれにはフランス語を正科目、歴史とラテン語を副科目に選んだ。この勉学時代、かれは個人教授でかせいで生活のたしにしていた。しかし、この試験科目のほかに、オリエントの諸語ととくみ、アラブ語とペルシア語は van Mehren に、サンスクリット語は Fausbøll, アヴェスターは Edvard Lehmann, トルコ語と、のちにはアラブ語も、Johannes Østrup について読んだ。特に Østrup はオリエントに旅行してその事情に精通していたので、クリステンセンのオリエントへの関心に至大の振幅で共鳴した。しかしクリステンセンの関心はしだいにイランの言語と文化に集まって来ていたが、Rask とか Westergaard (本稿 p.75) とか、この方面では開拓者に事を欠かず、図書館も貴重な文献を有していることは誰れも周知のとおりであるが、コペンハーゲン大学には当時これといってイラン学関係のきまった授業は行なわれていなかった。ペルシア語 (近世) はアラブ語の付設にすぎず、アヴェスターもながい間をおいて講義されるくらいのもので、パフラヴィー語にいたっては演習

さえ一度もなかった。こんなありさまであるから、イラニストを希望するものは結局み
ずから開拓する以外には法がなかった。こういったなかから最初の論文 *Rustem, den
persiske Nationalhelt* (上掲) と、それにつづいて *Fortællinger og Fabler af per-
siske Rammeværker* [ペルシアの枠物語に属する説話と寓話] (1899) は生まれた。だから
古典近世ペルシア文学へのすぐれた理解を示すこの論文は極めて貴重なものであった。
1900年1月教職員(官吏)試験をうけたが、この前後にかけてペルシアや啓蒙時代のフ
ランスにテーマを取った多くの小論文を發表し、試験の直前にはシャルル・ボードレ
ール論でフランス文部省の賞金を獲得している。試験後は公共団体の補助金を得てロ
ンドンとパリにオマル・カイヤームの写本を探索、またスペインに赴いてモウル文化の遺産
に對面、さらに1902年にはベルリンに来て *Seminar für Orientalische Sprachen* で
大イラニスト F. C. Andreas 教授の門をたたいた。Andreas の学風は人も知る独得
なもので、長期間ペルシアに滞在してえた豊富な知識はただかれの口を通してのみ伝授
され、筆をとることは皆無に近かった。本格的な講義とか演習などは一切やらず、門を
たたくものを誘っては自身の大きな研究に参加させたものである。当時の Andreas は
こういった雰囲気の中、中期ならびに古代イランの諸方言相互の關係を主として民
族学的見地に立って觀察し、それとアヴェスター語の諸問題とに關する独自の学説を
形成構築しはじめていた。のち、ゲッティンゲンに移ったのでクリステンセンもこれに
同じたが、清新卓抜な学説、人を捉えてはなさぬ人間的魅力にひかれながらも、クリ
ステンセンは師の及ばぬところに新しい展開を与えてこれを助けたりした。Andreas と
いっしょに過ごした研究の夜々はクリステンセンが終生、喜びと感謝で回想していたも
のであるが、実にこのドイツの大イラニストはクリステンセンはじめ、一流のイラニ
ストたちがその著書や論文の諸所に散見的に引用しているところによって、その学説や見
解をうかがわしめるといった特異な存在であった。だから、早いのはしが本稿 p.70 に
みえる *Iranische Dialektaufzeichnungen aus dem Nachlass von F. C. Andreas*
zusammen mit Kaj Barr und W. Henning bearbeitet und herausgegeben von
Arthur Christensen である。このように Andreas の遺稿の形で門下生の手になる發
表もかなりに見い出されるありさまである。

さてクリステンセンはベルリンから帰還後、學位論文 *Omar Khajjâms Rubâijât,
en litterærhistorisk Undersøgelse* [オマル・カイヤームのルバーイヤート。文学史的研究]
を完成し、1903年6月4日にその審査に合格して Dr. phil. A. Christensen の誕生を
みたわけである。じらい、この研究の線は その後もひきつがれ1927年には *Critical*

Studies in the Rubá'iyát of 'Umar-i-Khayyám. A revised Text with English Translation を発表した。この両書については直接ボル教授に聞くほうが適確であろう。まず学位請求論文で“クリステンセンは、広範な資料研究に基づいて同詩人の伝記に関する諸所与を批判的に博渉し正真性の問題に批判的検討を加えた。この最後の問題における困難さは、当時知られていたこの短詩^{エビグラム}の最古の写本が詩人の没後 350 年にはじめて筆録されたものであり、かつこの写本は 158 詩聯しか含んでいないのに対し、新しい諸写本は 700—800 を含んでいるという点にある。そうすると、詩聯の増加が絶えず行なわれていたとみなしなければならない。一部はそれぞれをぬいで Vandredigte (走入詩) ということもわかってきた。他の、有名な詩人たちの作で、文体や内容に親縁のあるところから、時とともにオマル集録中に編み込まれた詩のことである。名高い走入詩が分離されてあとに残った集録のなかで、どれがオマルのもので、どれが他の詩人の手に成るものかについて確かな標準を見出すことの不可能なことが今やわかってきた。こうしてオマル自身の詩人としての個性を把握することの実行不可能なことがわかったので、クリステンセンは、文学のジャンルとして、かつまた逃避と完全な自己放棄から極端な人生享楽へとわけもなく転じうる軽移性心情という、ペルシア人の国民性における最も基本的なる特色の表出として、ルバーイー詩を特性づけることに主要点をおいた。その研究は立ち入った心理学的理解をもって遂行され、クリステンセンの不屈のリアリズムによって支配されている。この書は上梓されるとすぐ一般の認めるところとなり、翌年 (1904) にはフランス語による新しい修正版があらわれた。” (pp. 5-6) Recherches sur les Ruba'iyat de 'Omar Hayyám がそれである。その後博士は“最古の諸写本が詩聯の配列情況に従って、相互に独立した、いくつかのグループにわかたれることを観察”し、Critical Studies……(1927) においては、その“数グループのなかでルバーイー詩聯がどんな範囲にあらわれているかを定立してみても、原型中に所在していたに相違なく、またそれゆえに他の詩聯よりも純度もいっそう高いはずの 121 詩聯から成る一団を取り出しうることがわかった。詩聯の内容と形式には少しも顧慮せず企てられたこの抽出では、今や一個の詩人としての性格の相貌が、かの大きい方の諸集録とは、全く別趣の関連をもつかの印象をも与えた。” (p. 6) この両書といわば同一の線にあるものとしてイスラム・オリエントの文化の種々相を一連の論文に発表しているが、なかでも Muhammedanske Digtere og Tænkere [ムスリムの詩人と思想家] (1906) は Abu'l-'Alá al-Ma'arri, Avicenna, Našir i Khusrau, Sa'di その他を通じて流れるイスラム精神の主脈を見事にえがいている。

博士はイスラム・ペルシアと取組んで早くイラニストとしての地歩を確立はしたが、学位論文通過後もながく不遇であった。時には友人と組んだり、時には単独で、語学を教えたこともあり、ジャーナリストとしても活躍していた。1907—18年には *Berlinske Tidende* [ベルリン・ニュース] の外交関係の寄稿家となっていたし、時には無給講師 (Privatdocent) としてコペンハーゲン大学でイラン語の講義や演習もしている。この間、1916年には *Kirsten Grymer* を迎えて終生の契りを結んだ。そのうち 1917年2月 *Axel Olrik* 教授が逝去し、哲学科から繰りかえし再度の申請が出て 1919年4月1日、イラン語学の独立講座が設立され、博士は員外教授 (Professor extraordinarius) に任命された。

一方、中世イランの研究も早くからすすめられていた。その最初の成果は *Romanen om Bahrâm Tchôbin. Et Rekonstruktionsforsølg* [バフラーム・チョーベーン譚。再構試論] (1907) である。クリステンセンの中世イラン研究はドイツの大オリエタリスト *Theodor Nöldeke* の *Geschichte der Perser und Araber zur Zeit der Sasaniden. Aus der arabischen Chronik des Tabari* を出発点としているが、*Nöldeke* がこのサーサーン王朝の僭奪者バフラーム・チョーベーン (!) についてアラビアの史家やフェルドウシーらが *Kärnâmak i Artaxšēr i Pâpakân* (アルタクシュール行伝) のごとき有名なパフラヴィー語書をどういう風に取り扱ってその伝記的物語を作り上げているかを詳しく掘りさげていたのに基づいて、クリステンセンは“今や、散失したパフラヴィー語原典における取扱いの過程と、それに或る程度まで本文をも、再構しようと試みた。この再構は、サーサーン帝国が没落してイスラム世界帝国のなかに興隆するに至る直前に形成されていた、中世ペルシア封建制下の騎士生活をうかがわしめて甚だ興味がある。” (p. 7) とはボル教授の至評である。クリステンセンは同じ年 (1907) に *L'Empire des Sassanides. Le peuple, l'état, la cour* をも出している。サーサーン帝国の社会構造と政治を、東西両洋の資料を博渉駆使して、総合的に描写したものであるが、学界の要望をみたして1927年にはその再版を出している。そのすこし前 (1925年) には *Le règne du roi Kawâdh I et le communisme Mazdakite* を世に問い、共産主義者マズダク (Mazdak) とかれに対する、サーサーン朝王カワート一世 (488-531) の態度を、アラブ語やペルシア語の資料を検討して、明きらかにするとともに、サーサーン朝の列王記 *X'atay-nâmak* から降って、それを利用したイスラムの編述者たちに至る、諸伝承径路を明きらかにした。こうした深い研究と不断の努力はやがて結実して1936年には本稿冒頭に挙げた“大作” (改訂再版は1944年) となって出現した。ペルシア語訳の出たこと

は当然であろう。Iran dār zāman-e Sasāniyan, …… tā'lif-e Profesōr Ārtūr Kris-tensen, tārjome-ye Rāšid Yasemi. Tehran Mehr mah 1317=1938 は初版の訳であるが、筆者は同 Esfānd mah 1332=1953 が再版の訳であることも付記しておきたい。

クリステンセン教授の飽くなき研究はイラン史の最古の伝説時代にまで拡大されて Les Kayanides [カイ王朝またはカウイ王朝] (1932) の出現となった。この書で最も高く評価されるのは、イランの伝承を 1. ゴロアストラ教系のもの¹⁾、2. 国家民族系のもの²⁾に二分したことである。1. はアヴェスターとそれに依拠した神学的パフラヴィー語文献にみえる伝統で、宇宙開闢論や終末論的要素が支配的であるが、これに対し 2. は X'atay-nāmak や伝奇文学に依存したアラブ・ペルシア語文献の所伝に属し、原初の歴史と人類の起源から降ってサーサーン朝の Xusrau 二世 (590-628) に及ぶイランの国家的系脈で、ここでは“貴族階級に人気のあった物語素材が編み込まれ、神話素材が合理化され、そして純粋に人間的なる徴跡が描写の中に押し出していて、それがゲルマン人におけると同じく英雄物語の特色をなしている。クリステンセンがここで到達した資料両分法は、イランのもつ歴史の構造をよりただしく評価するのに基本的な意義をもつことがわかってきた。”(p. 9) 教授はこの方法を用いて、のちに述べる Heltedigtning og Fortællingslitteratur hos Iranerne i Oldtiden [古代イランの叙事詩と説話文学] (1935) においても、イランの諸伝承をたくみに分類処理して読者に一読その脈絡を知らしめているとは、筆者の感慨である。この種の取扱いかたは教授の特に長じていたもので、Le premier homme et le premier roi dans l'histoire légendaire des Iraniens. I 1918; II 1934 は人類の始祖と最初の王をめぐる伝説素材の殆んどを取扱ったものであるが、“イランにおける物語の歴史を完全に描写し、さまざまな時代の、変化のある宗教的、政治的、社会的乃至文学的情況下における、諸物語の起源とその変貌とに照明をあてること”(p. 8) が狙いであり、この狙いは成功した。それゆえに、筆者は本書 (I p.133 以下) によって、たとえばヘーロドトスの“歴史”Ⅳ 5 6 にみえる南ロシア・スキュタイ族の始祖物語とアヴェスターの Yašt 19 にみえる、いわゆる Parađata/Pēšdat 王朝なるものとの関係を知ることができるのである。すなわち、コラクサイスを祖とせる部族パララタイ (Παραλάται) は、F. C. Andreas のいうようにアヴェスターの Parađata (Haošyañha の綽称であるが) に、またアヴェスターの Taxma Urupi すなわち“勇者”Urupi はコラクサイスの兄アルボクサイス (Ἀρπόξαις) に同定されるであろうし、従って北方イラン語族の伝承とアヴェスターのそれとの関係

が肯定されねばならぬこととなる。円熟した学殖をもってイスラム以前のイランの叙事文学と説話文学を概観したものが、上掲 *Heltedigtning og Fortællingslitteratur*… (1935) で、コペンハーゲン大学の祝賀出版である。そのうち、さきに述べたところは、ここには、繰り返さないこととして、筆者は本書ではヘーロドトス、クセノポーン、アテーナイオス(カレースを典拠とする)、エステル記、トビアス書、アヒーカル物語などにおけるイランの叙事文学や説話の掘りおこされている点を、一つの特色として挙げよう。キョールーパイデ^{キョールーパイデ}イアーに示したクセノポーンの、イランに関する知識がどこで得られたかを問われたとき、クリステンセン博士は H. Massé 教授に小アジアと答えているが、これは筆者も首肯できる。*Heltedigtning og Fortællingslitteratur*… のうち、この西方資料との関係をもかなり簡略にし、これに代えて中世イランの詩とアラブ・ペルシアのそれとの関連などに考察を試みたものが、そのフランス語による改版ともいべき *Les Gestes des rois dans les traditions de l'Iran antique* (1936) である。*Le premier homme*… 以下の諸書を通じて読者はそこに“最古のアヴェスター・テキストそのものから出て近世イランの国民伝統におよぶ長大な年所にわたってイランの物語をたどることができるし、また若干の物語圏はインド文学の助けをかれば、その起源がインド・イラン共通のものであることを論証”(p. 9) することもできるから、これらの書は“インド・イラン的物語や同宗教を特に探究するうえにその提供する収穫とならんで、一般説話学にとっても啓発するところが極めて多い”(p. 9) のである。

アヴェスターに対するクリステンセンの関心も極めて早くから示されている。Naar levede Zoroaster? [ザラスシュトラはいつ在世していたか] (言語・歴史学会における 1894 年 12 月 13 日の講演) や Hvor var Avestafolkets Hjemstavn? [アヴェスター民族の故土はどこにあったか] (同上学会 1904 年 2 月 18 日の講演) などに筆者はそれをみとめることができる。*Le premier homme*… I (1918) でも当然アヴェスターには触れたが、その後しばらく停滞している。ところが、A. 1926 年になると *Quelques notices sur les plus anciennes périodes du Zoroastrisme*, ついで B. 1928 年には *Études sur le Zoroastrisme de la Perse antique*, C. 1932 年には *Les Kayanides* (上掲), D. 1943 年には *Le premier chapitre du Vendidad et l'histoire primitive des tribus iraniennes* とセキを切ったように研究の発表がつづいた。これら一連の研究ではザラスシュトラの生地や在世年代、かれとハカーマニシュ王朝との関係も取扱いの対象となった。D は教授の最後の研究に属するともいえるが、表題の示すように、アフラ・マズダー所造の各地域を記述せる *Vidēvdāt* (*Vendidad* は誤読に基づく通称) 第一章を取扱い、

その古い韻律本なるものを抽出するとともに、その古韻律本なるものがメディアのマグシュ僧団によって、かれらの手に成るゾロアストラ教伝道の成功を記録する方向に改編されたとするのであるが、この研究で見のがしえないのは、この第一章中にはパールサ（ベルシス、今のフェールス）が記載されぬ点から、この地域では西暦前5世紀にはまだザラスシュトラ教の流行をみなかったとみるべき間接的拠証の得られることである。これはどういうことを意味するか。その意味をボル教授はこう指摘している：“アヴェスター・テキストの年代にとって、この研究はさらにつぎのごとき重要な結果を提供する、すなわち、メディアのマグシュ僧団の対ゾロアストラ教改宗は、一般に容認されているよりもはるかに早く行なわれたに相違ない、というのは、クリステンセンの研究に従えば、西暦前5世紀にすでにかれらが古い東イランのアヴェスター・テキストの改編にたずさわっていることを、われわれは認めうるからである。改革された（開祖によって）ザラスシュトラ教と古いアリア人の宗教との合揉として、この“メディア系”アヴェスター版のなかにわれわれの見出すものは、数世紀にわたる宗教的アツレキの結果に相違ないから、ザラスシュトラの在世代は、Les Kayanides では別の推論から蓋然的措定としてほぼ西暦前650—600年代としているが、それよりも相当古く溯ることもまた不可避となってくる。”と。(p. 11) この最後の著作が出るまでにはまずBCにおいて、アヴェスターを構成する諸部分の比較年代が定立され、初期ハカーマニシュ王朝の宗教がザラスシュトラ教でなかった点が反省肯定された。この最後の点はE. Benvenisteの主張を取り容れたものであるが、アヴェスター・テキスト諸部の比較年代というのは、いわゆる古体 *Yast* とよばれる諸章において讃歌の対象となっている諸神格は一部はザラスシュトラが排斥したものであり、またそのために悪魔とされたものと同じものであるから、かかる諸章は、*den yngre Avesta* (新体アヴェスター) と呼ばれていても、その内容形式双方から見てザラスシュトラによる改革よりも古いはずであり、従って *Gaṇa* 詩篇に先行するといっているのである。この意義をボル教授は“ザラスシュトラの革新運動に対する宗教史的理解にむかって、全く新しい展望を切りひらいた”(p. 10) ものといっている。これは同時にAにおけるクリステンセン教授の主張を一部修正したもので、Aにおいてはザラスシュトラの生地を東イランとし、その改革したアフラ・マズダー教は、イラン部族の最初の西方移動（西暦前9世紀の前半）とともに西イランに來たものに相違ないから、ザラスシュトラの在世代は西暦前1000年頃よりも新しいことはないはずであると推論していた。

こうした一連の研究に不断の生命をかけてきた反面、教授はイランにも長期旅行を前

後三度も試み (1914, 29, 34), 多くの収獲を挙げている。なかでも特筆すべきは方言採集とその整理である。Contes persans en langue populaire, publiés avec une traduction et des notes (1918) もその成果の一つであるが, Le dialecte de Sämnan. Essai d'une grammaire sämnänie avec un vocabulaire et quelques textes suivi d'une notice sur les patois de Sängsar et de Lasgird (1915); Contributions à la dialectologie iranienne. Dialecte Guiläki de Recht, dialectes de Färizänd, de Yaran et de Natanz. Avec un supplément contenant quelques textes dans le persan vulgaire de Téhéran (1930); Contributions à la dialectologie iranienne. II. Dialectes de la région de Sëmnan : Sourkhéi, Lasguerdi, Sängesäri et Chämerzädi (1935) を発表している。すなわち, まずセムナーン地方の方言を取扱い(1915年), ついでギレク (Giläk-レシュト Rešt 地方), フェリゼンド, ヤラン, ナタンズ各方言を文法的に整理したものにテヘラン俗語による若干のテキストを併わせて示し (1930), 最後にはまたセムナーン地方にもどり, スルケ (Surze), ラースゲルド (Läsgerd), センゲセル (Sängesär), シェメルゾド (Šämerzäd) 各集落の方言を記述している (1935)。この方面における, 他と共同の業績として, Les dialectes d'Awromän et de Pawä. Textes recueillis par Åge Meyer Benedictsen, revus et publiés avec des notes et une esquisse de grammaire par Arthur Christensen (1921) はデンマークの旅行家 Åge Meyer Benedictsen が 1901 年イランのゴルデスターンで採録したアヴロマンやパーヴェの方言によるテキストを同氏と共同で整理したものであり, 同年に出た Textes ossètes. Avec un vocabulaire (1921) は第一次世界大戦中デンマークで擱坐して捕虜となったオセツト人の援助で蒐集作成したオセツト語テキストとして異色あるものであり, 最後には F. C. Andreas の遺稿を他のイラニストと整理して共同出版した形となった Iranische Dialektaufzeichnungen aus dem Nachlass von F. C. Andreas zusammen mit Kaj Barr und W. Henning bearbeitet und herausgegeben von Arthur Christensen. Erster Teil : Sivändi, Yäzdi und Söi, bearbeitet von Arthur Christensen. Kurdische Dialekte, bearbeitet von Kaj Barr (1939) がある。クリステンセンが近世イラン諸方言に関心をもつようになったのは F. C. Andreas に負うところであるが, さきにも述べたように, 両教授のこの方面における関心は言語学的分野でなく, 歴史・民族学的分野にあった。現時の方言情況を知って, 1. 古代イランの民族地理学的情況や, 2. メディア (のちにはバルティア) とペルシア (ペルシス) との間の情況, さらに 3. ハカーマニシュ, サーサーン両王朝の用語に F. C. Andreas

のみとめていたメディア、パルティア語のそれぞれの混入を、いっそう明確に把握しようというのが狙いであった。クリステンセン教授はみずから、専門の言語学者とは思っていなかったし、従って純粹に言語学的な問題の論争には立入ることを好まぬ風であったが、“しかし、かれの発表したテキスト資料は採録されるに当たって表音上の細緻さ——といってもそれは不用なものであるが——を欠いではいても、諸方言の声音体系における基本的なものはじかに感取してなされており、諸方言についてかれの行なっている明晰な文法的記述とともに、北西イランの方言情況に関するわれわれの知識の極めて貴重な増強を意味する。”(p. 13)

このように豊富な収穫のあったイラン旅行は別の面でも、筆まめな教授をうながして、諸種の著作を生み出させた。Hinsides det kaspiske Hav. Fra en Orientrejse ved Krigens Udbrud [カスピ海のかなた。大戦勃発時のオリエント旅行から] (1918) は1914年2—8月の旅行記で、いわゆるまだ欧化の洗礼を本格的にうけていないペルシアの姿を伝えている。テヘランからセムナンへのキャラバン旅行で沿道やキャラバン・セライでの生活をつぶさに経験し、“テヘランでは立憲政体実現論者が第一次世界大戦前の何年間かを戦わねばならなかった内治外交両面のあらゆる困難について ナマの感銘をうけ”(p. 11), また特別に章を設けて、宗教改革運動バービー・ベハーイズム(Bābī-Beḥā'ism)を取扱っている。さらに、Det gamle og det nye Persien [古いペルシアと新しいペルシア] (1930) と Kulturskitser fra Iran [イラン文化素描] (1937) とは、それぞれ1929と1934年の旅行の成果を盛って、Reza Šah Pahlavī の治下(1926-1941)で起こった新事態に触れ、シャーの技術改革や社会改革の努力について詳説している。“以前から貧しいこの国がシャーの強引な技術化政策の結果として完全に疲弊してみえるのでは、この熱意も今やいささか行きすぎとせざるをえない。国民の資力も充分でなかったし、民衆も中世的東洋国家から近代的な技術工業社会へかくもはげしく移行することには精神面で全く用意が出来ていなかった。しかしクリステンセンの態度を左右したものが、イラン国民への暖い共感と、レザー・シャーが角逐する列強の軍事的および経済的圧迫から、一時、国をよく救いえたこと——もっともこれは主として当時ロシアが弱体だったのによるが——に対する賞讃であったことは疑いない。”(pp. 11-12) とはボル教授の評価である。イラン旅行のことは筆者は足利惇氏教授からよく話をきいたことであるが、フェルドウシー生誕一千年祭(1935年10月)にもクリステンセンはデンマークを代表して参列している。足利教授も H. Massé 教授とともに、ク教授と行をとともにされたが、自動車のとまる村々ではたえず土地の人に質問して手帳にメモする熱心さだったよしであ

る。ここにもク教授の学風をうかがいような気がする。

クリステンセン教授の学術的業績のなかで逸することのできないのは、物語の歴史、ならびに冒険譚主想 (*Æventyrmotiver*) の展開と伝播を取扱うことが主要な地位を占めていることである。一般民衆のもつ原始的でソボクな観念と、支配階級のもつ、人為的に展開された物語の伝承との間に提起される諸問題は、教授の早くから関心したところであった。このためには全世界の物語文学と冒険譚文学との到底的博渉、高度な追跡的嗅覚、犀利着実な結合能力を必要としたことはいうまでもない。このような教授の学域は、筆者が追躡しうるには、あまりにもひろすぎる。ボル教授のことは要約しよう。教授は追憶記 pp. 13-14 にこういう意味のことをいっている。Acta Orientalia とか Danske Studier には殊にこの方面に関する故人の短い民俗学的発表が数多く見られるが、ここではそのなかの一、二その他を挙げることにしたい。Trebrødre-og Tobrødre-Stamsagn. En Studie i sammenlignende Sagnforskning [三兄弟および二兄弟を祖とする部族物語。物語の比較探究における一研究] (*Danske Studier* 1916, pp. 45-86) は、世界のほとんどの民族にみられる国民的部族父祖物語を極めて簡潔に解明したものであるが、しぜんその解明は心理学的に展開されており、Motif et thème. Plan d'un dictionnaire des motifs de contes populaires, de légendes et de fables (*Folklore Fellows Communications* No. 59. Helsinki 1925) は大量の冒険譚と寓話の分類へのすぐれた提唱であり、Essai sur la démonologie iranienne (1941) は晩年の業績の一つであるが、サーサーン朝の国教ゾロアストラ教とイスラムの下で今日まで命脈を保ってきたイランの原始的民族信仰を掘りおこそうとつとめており、'Elm-e asaḫir [民俗学] (*Īrānsahr*, Revue littéraire et scientifique bimensuelle. 1ère année. Berlin 1331=1922, pp. 132-141) はヨーロッパの民俗学について書いたものであるが、目的はイラン人自身のもつ民族的冒険譚に対するかれらの関心を呼びおこすにあった、だからその論文の末尾に Munšī-zadah 夫人 (ペルシア人) が幼時に聞いたペルシアの冒険譚 12 話を写本のままで載せているのもうなずける。このうち 10 話は、ク教授がその著 Märchen aus Iran. Aus dem Persischen übertragen und eingeleitet (1939) に訳載したが、ペルシア語原文の方は注釈つきで出版の意図はあったが、余裕がなくて果たせなかった。こういった業績でもわかるように、イランを指向しながらも、民俗学一般にも教授は大きな貢献をした。Folkeminderaadet (民俗評議会) で実際に活動したり、Danmarks Folkeminder (デンマークの民俗) なる集いに会長をつとめたり、デンマークの冒険譚や物語、オリエントの民族文学の翻訳などを、注釈つきで出版している。

こうした多彩な活動の余暇をさいて、クリステンセン教授は文化や政治に関する多くの論文を発表した。そしてそれらにオリエントに関するもののあるのは当然であるが、そのほかにも、独自の政治心理学的著書を数種発表している。もとより筆者のうかがい知るをえない領域であるから、ここでもボル教授の来講を求めよう。それによれば (pp. 14-15) “Politik og Massemoral. Til Belysning af aktuelle Problemer [政治と大衆倫理。現下の諸問題の観照] (1911) と Folkestyrets Fremtid. Af Tidens politiske Problemer [民主政治の将来。現時の政治的諸問題のなかから] (1927) はともに多数独裁制下において、ヒューマンな文化価値をおびやかす運命に対する深い憂慮をもって支配されているが、その多数独裁制とは、クリステンセンの考えによれば、デモクラシーがぜんじ発展していったものである。目下行なわれている諸種の政治体制に対するクリステンセンの見解は圧倒的にペシスティックである。かれはこの点においてフランスの群集心理学者 G. Tarde と Gustave le Bon によってつよく影響された。” (p. 14) 技術の発達に大衆の無産化が増大一途をたどる現状では、適切な時機に有効な情況規制をもってのぞまなければ、“はじめはなんらかの形の経済的ならびに精神的自由があっても、それがあつた覚か一独裁者かの独裁下に窒息してのちには、この一切は、運命の必然によって指令されるままに、おそるべき破局におわるであろう” (p. 14) とし、広範な職能代表の構想をえがき、大政党や社会団体、職能階級がはなし合える場をもつことを提唱した。左右を問わず、いかなる種類の独裁も、ひとしく文化の敵として、かれは共感をもつことができなかつた。第二次大戦中、時点としては甚だ不利であつたにもかかわらず、かれは Skatteborgeren 誌上で一連の論説を発表し、“すべての人間的自由を独裁国家が暴力的に奴隷化することに対し、極めて痛烈な判決をくださった。” (p. 15)

最後に、クリステンセン教授の気質とその著作活動との関係を、もう一度ボル教授に聞くこととしたい。ボル教授によれば、かれは哲学者気質であつた。瞑想することを愛し、事態を心理学的に観察することに長じた。そういう点から、上來述べてきた民俗学的研究を民族心理学的研究とむすびつけて興味ある時局もの Engelsk og tysk Folke-aand. Kultur og Verdenskrig [イギリスとドイツの民族精神。文化と世界戦争] (1915) をあらわし、Drømme. Iagttagelser og Undersøgelser [夢。観察と研究] (1941) はその成果を専門の心理学者にも容認されたところのものである。しかし専門の科目としての哲学には接触が少なく、認識論も興味をひかなかつた。抽象とか体系とかは、むしろ嘲笑ええした。これに反し“かれは人類の慣習の熱烈な尊重者 (Iagttagere) であつた—— πολλῶν ἀνθρώπων ἴδεν ἄσπερα καὶ νόον ἔγνω——そしてこの点において、かれ

はみずから、第17ならびに18世紀の大モラリストの弟子と思い、また、やさしかったり極めて無愛想だったりして、かれの懐疑的でキマシメな性質とも大へんよく合っていた、ペルシアの処世哲学の弟子とも思っていた。かれは、歴史の歩みに、学びとることのできた数少ないものの一人と、みずから考えていた、そしてかれがそこに打ち立てていた説は威勢のいいものではなかった。この説によると、人類は高い理想をとく大きなことばを避けてその代わりに最も基本的な正義をみずから実践するには、どうもしりごみがちである。……人間の行動がすべて無常であるなかにあつて最後のよりどころは、かれにとっては学問であった、学問はどこまでも公正にしてあくまで不偏なる真理探究であり、まとはずれの顧慮で左右されることを少しも許さぬものだからである。着実な自己認識がクリステンセンの全進退の特徴をなして、かれが研究課題を選ぶにあつてとつた適確さのなかにもそれが發揮されている。かれの主要な努力がサーサーン朝期ならびにその文学的遺産の研究にあることは決して偶然でない。史家はこの点において、サーサーン朝の碑文と東西両洋のもつ極めて広範な文献のなかに、自由に駆使しうる豊富な資料素材を有しているから、政治的展開の像をえがきうるばかりでなく、宗教的ならびに哲学的ないろいろな動きのなかに反映している、個々の時期の精神生活に、より深くはいつていくことも可能である。アヴェスター研究では史的伝統は早く断絶したので、事情が全く異なっている。古いテキストが成立したとき、そこに幾種類かの宗教思想が表現されていたが、すでにサーサーン朝期の終りごろになると、ながいあいだもはやそのことを人びとは夢想さえしてはいなかったのである。この困難な領域ではクリステンセンは、文献批判的分析か民俗学的観察法の適用かで解決されうるような課題を取りあげることに、わざととどめている。少なからぬ同時代人と同じく、かれも宗教生活には直接的感覚を欠いていた、そしてかれは、古代イランにかつて生きていた宗教なるものについて、まがりなりにも支持しうる考えに到達することが果たしてできるであろうかを、心底から疑っていた。かれが、不精ぶしょう、ようやくスーフィー文献を手掛けたのも、宗教現象と取組むことをきらったがためである。しかしながら人生に対するかれの特異な態度からこうした制約があるにもかかわらず、かれは、その大きなそして多方面にわたるライフ・ワークをもって堅固な基礎をおいたもので、これは将来の研究のより広い抛りどころとなることができよう。”(pp. 15-16)

まことにそのとおりである。ボル教授は追憶記では特別に触れていないが、たとえばコペンハーゲン大学図書館所蔵のアヴェスターおよびパフラヴィー語写本 Codices

あ と が き

Avestici et Pahlavici Bibliothecae Universitatis Hafniensis Vols. I—III の複写刊行である。Rask と Westergaard の蒐集したこの写本の刊行は1912年8月アテネの International Congress of Orientalists でその重要性を決議されているし、その限りではクリステンセン教授独自の業績であるとはいえないかもしれない。しかしそれぞれ 1931, 32, 34, 34, 36, 36 (以上はいずれもクリステンセン教授の Introduction 付き。以下はボル教授の Introduction 付きなるも編集者は依然としてク教授) 37, 38, 39, 41, 42, 44 と着実な歩度をもって刊行されてきたことは、編集に人を得てはじめて可能のことであった。不朽の功績と称して少しも過言でない。その著した多くの論策が異論の余地を残していることも事実である。げんに筆者によって、Les Kayanides における教授の見解に小さな反論も試みられており (本誌 No. 6, p. 6 ff.), The Būndahishn... ed. by T. D. Anklesaria, t. p. 231₁₄—232₁ に対する筆者の詩形再構は Heltedigtning og Fortællingslitteratur... p. 34 や Les Gestes des rois... p. 49 における教授の読みかたに対する反論ともなる (言語研究 Nos. 26/27, p. 94)。しかしこれらは極めて一部分に対するもので、却って教授の大を反顕するばかりである。教授の見解が支持されぬ日が到来しても、その論書はイラン学史とともに残るであろうし、かかる日にも尚お燦たる光芒を放つもの——それこそ、この複写本刊行の偉業である。

註

- 1) ソロアストラ教というのはザラスシュトラ (Zarathuštra) の原始教義が他の信仰と合採した形態をさし、これに対し原始教義、すなわち、かれによって改革されたままの教義は特に区別してザラスシュトラ教とよばれている。このほかにも多くの註を意図していたが紙数の都合上不本意ながら全部割愛した。

あ と が き

- 本号は多彩な顔ぶれで学術誌としての特色を強く印象づけることと思うが、珠玉の雄篇を恵投された執筆者各位のご高情はもとより、多数ご加入の会員諸氏のご協力など、編集部一同感謝の至りにたえない。
- 前号は予定超過10ページ、本号は実に20ページ。会員諸氏への大サービスであるが、それだけでなくさえ容易ならぬご配慮をいただいている足利惇氏会長のご高配は、筆舌にも尽くしがたく、深謝のほかはない。
- このうちは一人でも多くの新会員をご紹介いただけたらとは、編集部一同より会員諸氏への心からのお願いである。
- 印刷は、引きつづき、あぼろん社主伊藤武夫氏をわずらわした。付記して同氏の労を多としたい。
- 次号は明年6月末刊行、書評も加え豪華な執筆陣をもっておめえする予定。ご期待を乞う。

【編集部記】